



1200500682431

新井宿

大田区教育委員会
社会教育部社会教育課文化財係
大田区大森北四丁目16番4号
電話 3773-5111 内線5535

1993年3月発行



八景坂鎧掛松（「江戸名所図会」長谷川宗秀画）

荒蘭宿—荒井宿—新井宿

新井宿は、万葉集や続後撰集などに「荒蘭崎」「荒蘭磯」等とよまれた歌があるように、「荒蘭宿」とも書かれ、中世の頃には「荒井宿」とも書かれた。

「アライ」ということから、(一)蘭草すなわち畠表にする草がこの地に生えていたり、(二)荒い磯辺であつたり、(三)新しい井戸＝水路に關係のあつた町場ということが考えられる。また「宿」とあるため、古代の荏原郡の駅屋の地と推定され、古代から中世にかけて古東海道が通つっていたとされる。

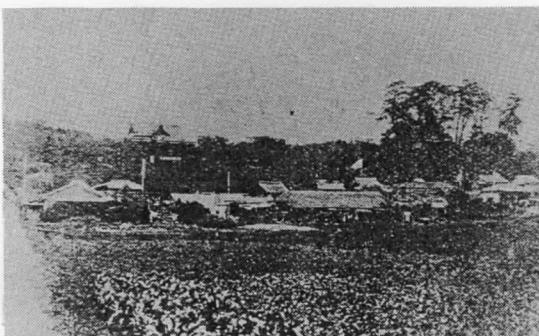
現在の大森駅山王口前の坂道は八景坂といい、伝説では源義家が奥州征伐の途上、この地の松に鎧をかけた鎧掛けの松があつたといわれる。

八景坂は、坂上からの眺望がすばらしく、好事家によつて八景が選ばれたところから名付けられたといい、またかつては相当な急坂で、あたかも薬草を刻む薬研の溝のようなので別名薬研坂ともいわれたという。

天祖神社の境内に建つ八景碑には「笠島夜雨、鮫洲晴嵐、大森暮雪、羽田帰帆、六郷夕照、大井落雁、袖浦秋月、池上晚鐘」と勝景詩が刻まれている。

江戸時代の新井宿村は、明治一年(八八九)、不入斗村と合併して入新井村になつた。昭和七年(九三一)に再び分かれて大森区新井宿(七丁目)(昭和一年からは大田区)となつた。昭和三九・四〇年の住居表示改正にともない、現行の山王(四丁目)、中央(四・七丁目)、大森北(四・五丁目)、大森西(四丁目)、南馬込(三・四丁目)となつた。

山王台地



大森北から山王を遠望（昭和2年頃）左上の風景が八景園

山王一丁目から四丁目にかけての山王台地には、大森貝塚や山王遺跡、新井宿・山王横穴墓群等の遺跡が発見され、すでに縄文時代からこの地域に人間が住んでいたことが確認されている。

江戸時代には、八景坂や木原山等で江戸庶民に知られていた。近代になっても、梅の名所として有名になつた八景園や小銃の練習場である大森射的場、望翠樓ホテルや大森ホテルなどがあつて行

樂客を呼んだ。また城南地区における高級住宅地として著名な人たちが居を構えた。

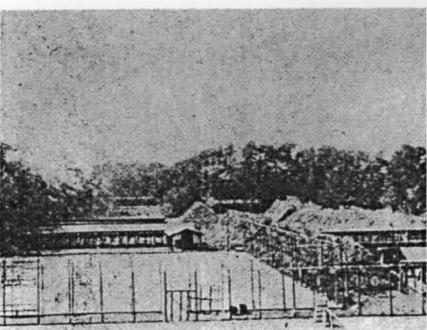
八景園

明治七年（一八八四）に、久我邦太郎が、この地域（山王二一〇一・一付近）を開発する目的で一万坪（約三・二ヘクタール）を買収してつくつた遊園地である。



八景園内（大正8年頃）

天祖神社に隣接した地で八景が眺望できるということから八景園と名付けられた。同一〇年にわらぶきの家屋を建て、梅や桜などを植え、翌年には料理屋三宣楼が開業しカ一料理を名物にした。



大森射的場（大正末頃）

明治一年（一八八二）に、東京共同射的会社によって、小銃の民間練習場として本郷向ヶ丘からこの地（山王二一一四）に移転され、開かれた。経営には射撃の名手で、村田銃の発明者である村田経芳等も参加したといい、当時の主要兵器であつた小銃射撃訓練を通して軍事思想を普及させる役割を果たした。しかしそ次第に付近に

このホテルを会場として、「大森の丘の会」という山王や馬込の人を中心とした芸術家の会合が行われた。会のメンバーは、日本画家の小林古径、川端龍子、伊東深水、渡辺文子、油絵の白滝幾之助、水彩画の真野紀太郎、木版画の長谷川潔、工芸の藤井達吉、歌人の橋田東声、日夏耿之介、片山広子

明治二十五年には皇后（照憲皇太后）がおいでになるほど有名であつたが、大正三年（一九一四）には住宅地として分譲され、まつた。

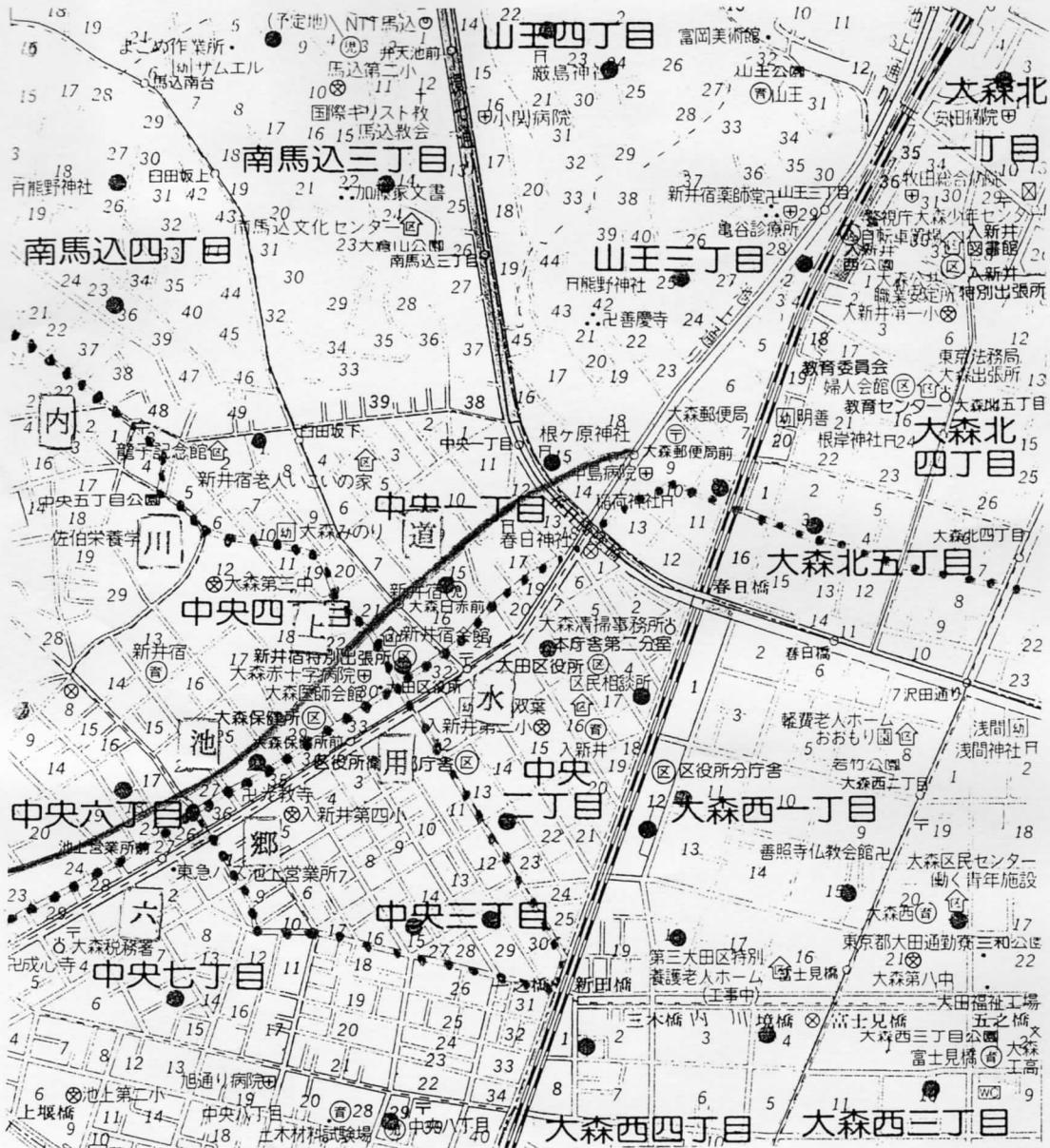
望翠樓ホテル



大正元年（一九一）に、現山王三一二四・ニ五付近の高台に建てられたホテルで、眼下には大森帶から東京湾の勝景を望むことができる。各

客室に浴場・トイレがあつたといい、当時としてはあまり類例を見ない本格的ホテルであつたといふ。付近により近代的な本格的ホテルである大森ホテルが、大正一年に開業したため、経営不振となり、ついに廃業した。

住宅が建ち、演習ができなくなると敷地の一部にテニスコートがつくれられ、残りは分譲地にして鶴見に移転した。



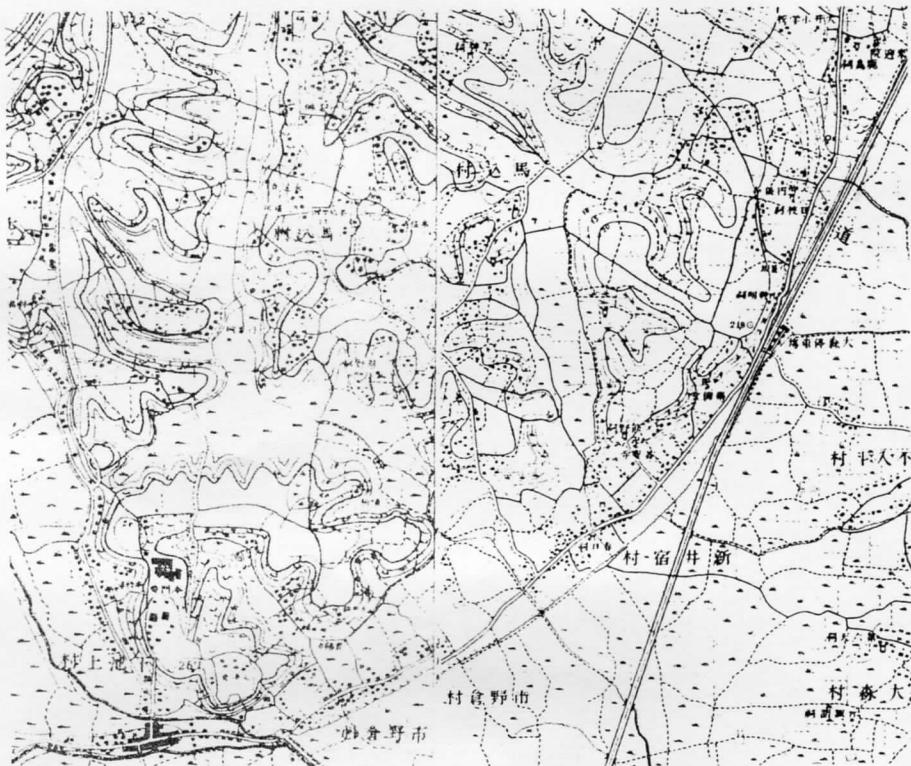
らであつた。白滝を除けば、いざれも若き芸術家で、堅苦しい会合ではなく、知り合いの芸術家の「だべり会」であつたという。

池上道

新井宿村の中央を通る道は、池上道（平間道）といわれ、品川宿から大井、新井宿、池上本門寺前、矢口、「平間の渡し」へ達し、池上本門寺への参詣に利用された。

江戸時代の地誌に、新井宿村は「今の大森保養所（現・大森第三中学校）八景坂（名薬研坂）」を下り、右のかたに桃雲寺といへる禪刹に隣り木原氏の陣屋あり。うしろの山を木原山と称す。むかしの官道はこの山の上にして、所謂荒蘭崎」であり、また「往古東海道往還の係る所にして「和名抄」に駅屋とある」と記されている。古代から中世にかけての古街道は、木原山などの台地上を通りいたと推定される。

現在のバス通りに改修拡張工事が行なわれたのは、周辺の宅地化が進み交通も発展してきた昭和七年から一年（一九三一～三七）にかけてのことである。



明治14年（1881）測量 I 20,000地形図〔二子村〕〔品川駅〕



大正6年（1917）測図 I 25,000地形図〔東京西南部〕〔川崎〕



昭和20年（1945）部分修正測図 | 25,000地形図〔東京西南部〕〔川崎〕



平成元年（1989）修正測量 | 25,000地形図〔東京西南部〕〔川崎〕

木原山

大森駅前の天祖神社から山王三丁目の善慶寺の辺りまでのびている山王台地は、江戸時代には木原山とか陣屋山といい、新井宿村の領主木原氏の陣屋と屋敷が置かれていた。

木原山は、万葉集に「草陰の荒蘭之崎の笠島を見つゝか君が山路越ゆらむ」と、また続後撰集に「白波のあるの崎の磯馴松かはらぬ色の人ぞれなき」等と詠まれた荒蘭崎の旧跡とも伝えられ、八景坂とともに江戸庶民にも知られた。

この木原山 帯は、樹木が繁茂し薬草も自生しており、将軍らがうさぎ等の小動物を対象とした狩場で、木原屋敷は、その際の休憩所として使用されたという。

円能寺（山王一六一ニ〇）には、捕獲した鶴の靈を供養するため建てられた「鶴墳」がある。

これは明治三五年（九〇二）に、橋爪英麿と英順によつて建てられた。一人は、江戸時代に御鷹

野の鳥類管理を担当した綱差役、



鶴 墓

橋爪源太郎家の子孫である。源太郎は、享保一年（七七）に、八代將軍吉宗の命により、伊勢田丸領小俣田村（三重県）から不入斗村に移住し、代々、鷹狩を支えられる裏方の役目を果たしてきた。

領主・木原氏

木原氏は、徳川家康の関東入国に際し、初代木原吉次が領地として与えられて以来、江戸時代を通じて新井宿村の領主であつた。

近世初頭には、幕府の大工頭をつとめた家で、江戸の町割りや建築計画を担当し、建築全般に及ぶ仕事をしていた。しかし慶長七年

（六〇二）に吉次の嫡男重次が病身で亡くなり、同三年に族

の中心であつた吉次が七歳の高齢で死去、さらに孫の重義も七年に病死し、家督を継いだのは曾

孫の義久であつた。義久はわずか四歳であったため、伯父の木原兵蔵次房が後見として木原方を統率したが、義久の成長とともに家督横領の争いが起きた。また幕府内においても、もう一つの建築集団中井方に圧倒され、大工頭を解かれ一般の旗本になる等、木原氏の地位もかわつた。

五代目重弘（義久の子義永）は、自身の事績を中心に、「木原系図」を編さんし、この間の事情を克明に記し、大工頭としての木原家の由緒を後世に伝えている。

新井宿薬師堂

義永は、また寛文四年（六六四）に、木原氏累代の事績や桃雲寺修復のいきさつ、木原山の風光を記した「桃雲寺再興記念碑」を建てている。撰文は大学頭林春

斎で、区の文化財に指定されている。桃雲寺は、木原吉次が新井宿村を拝領したときに、たまたま陣屋敷の隣に古ぼけて大破した薬師堂（医福山滝泉寺といった）、またその跡は、新井宿薬師堂（山王一一九一八）として、現在ではわずかな境内地と薬師堂が残つてゐるだけである。



富士講碑

桃雲寺碑の隣に建つのは、天保三年（八三一）に建てられた富士講碑である。これも区指定文化財である。角柱碑の正面には「仙元大菩薩」と

富士山の尊称が刻まれ、台座は龜をかたどられている。

新井宿村の富士講の人々によつて、富士講中興の祖といわれる食行身禄の没後百年を記念し、村内安全を祈願して建てられた。

熊野神社

社伝によれば、元和年間（一五六〇—四）に新井宿村の領主木原木工允により建立されたと伝えられる。「新編武藏風土記稿」によれば、寛永二年（六三六）に木原氏が大工頭として担当した日光東照宮の余材を使用して本殿が建てられ、御神体として東照宮落成時に礼式の飾りとして使われた張りぼてのかぶとが納められたといふ。

また、この地の領主木原氏は、本姓を鈴木といい、紀伊の熊野権現に仕える鈴木氏の族で、以前住んでいた遠江国木原郷（現在の静岡県袋井市）にも熊野権現をまつり祭務を分掌していたといふ。そこで吉次がはじめて新井宿の領主となつたとき、熊野権現をまつる古社が木原山の山ろくにあり、



熊野神社

新井宿義民六人衆

延宝二年（六七四）、新井宿村の農民たちは、領主木原氏の過酷な年貢の取立、さらに関東全域におよぶききん的状況の中で、九ヶ条にわたる訴状を提出し、さらに翌年、事件の発端ともなつた寛文元年の増徴に対し実状に即しあらはれらはいざれも黙殺され、最後の年貢負担を要求した。しかしこ

善慶寺（山王二一一二一六）には、彼らを供養する墓があり、東京都の史跡に指定されている。これは、二回忌に当たる延宝七年に、義民と有縁であった間宮藤八郎が、父母の墓という名目で建立したものとされる。墓碑の正面に父母の法名、裏面に六人の法名（是信、嘯慶、賢栄、道春、宗圓、椿葱）が刻まれている。

墓は一見通常のものであるが、



義民六人衆の墓（部分）

義民六人衆の墓

手段として延宝四年暮、幕府への直訴が企てられたが、事前に木原役人の知るところとなり、延宝五年、村人を代表した六人が捕らえられ、斬首の刑に処せられた。このため彼らは、いつしか義民六人衆と呼ばれ、村民の崇敬を集めようになつたと伝えられる。

ところで、この事件については、従来、領主木原氏の過酷な年貢増徴という面が強調されてきたが、最近、これは根拠のない増徴ではなかつたかという見解や、また六人衆の実像に関する疑問が示された。今後の研究がまたれる。



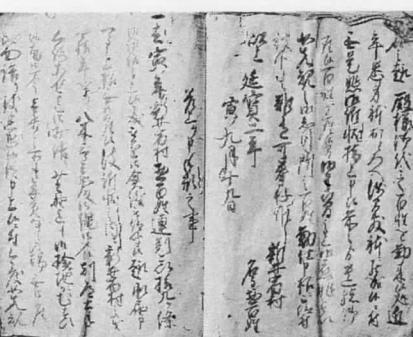
義民六人衆の墓

注ぐことで、公然と供養する訳にはいかなかつた裏側の六人をも供養できるように工夫されたもので、農民の知恵と義民に対する熱いおもいを感じることができる。

昭和四七年（九七一）までは門前の池上通りにむかう境外地（現在駐車場となつてゐる）に建てられていたが、寺域整理にともなつて境内墓地の正面に移された。現在では、六人を表側にして「義民靈廟」としてまつられている。この墓のほかにも、事件後に縁者や関係者によつて建てられたと考えられる供養塔が現存している。善慶寺にある延宝八年（六八〇）の題目講碑に賢栄と道春の名が見える。また、もと新井宿村の名主酒井權左衛門の庭内社であつたと伝えられる日枝神社（山王一六一）にある貞享元年（六八四）の庚申供養塔にも道春とその子らしい宗雪の法名が刻まれている。

訴 状 写

義民六人衆については、村民の伝承と墓石によつてのみ伝えられていたが、明治三四年（九〇）に、この事件を語る文書が義民の子孫である間宮家から発見された。この文書は、九ヶ条にわたる訴状をはじめ、関連資料を後年整理し、冊にしたもので、「新井宿村



新井宿名主惣百姓等訴状写(修理前)

名主惣百姓等訴状写として都の有形文化財に指定されている。近年、巻子仕立に修復された。

川端竜子と竜子記念館
川端竜子（八八五九、九六六）の庚申供養塔にも道春とその子らしい宗雪の法名が刻まれている。

——にある貞享元年（六八四）の庚申供養塔にも道春とその子らしい宗雪の法名が刻まれている。

訴 状 写

川端竜子（八八五九、九六六）は、昭和期の画家である。彼の創立した青竜社は官展（日展）、院展とて立する在野の団体として有名であった。昭和三四年（九五）文化勲章を受けた。

大正九年（九一〇）、南馬込十四九一〇に画室及び住居を新築して以来、昭和四年（九六六）に没するまで、ここで居住し創作活動を行つた。住居は、惜しくも昭和一〇年の

空襲で焼失したが、六〇坪もある画室は現存し、庭内には彼が好んでいう雑木が生い茂つてゐる。旧居は「御形荘」と命名され、ここでの研究会から「御形塾」が始まつて、多くの弟子達が学んだ。命名の由来は、この白田坂下帯の小字を子母沢といい、その文字を逆にして連想される母子—母子草の異称が春の七草の一つである御形であることから名付けられたといふ。

「その頃のこの大森は『朝』に於いて見られるような自然味の豊富な田園であつた。小流れも今やうに溝臭くはなかつた。小池の水も澄んでゐた。梅雨明けの朝の日が、池の周りの樹木を透かして水の面に届くと、そこにぼつかりと浮き出る、魚影を見ることが珍しくは無かつた」と、竜子は「慈悲光礼賛『朝』『夕』」の一部作の解説の中で記している。

竜子は、はじめ洋画を学び、新聞・雑誌の挿し絵を描いていたが、渡米してボストン美術館の日本画を見て感動、帰国後は日本画に転向した。第一回院展に「狐の徑」が入選し、さらに「靈泉由來」等が認められると、院友、同人になつた。しかし昭和三年、「健剛な芸術と会場芸術」を標榜する自然大作主義の青竜社を創立した。絶筆となつた「竜の図」は、製作途中で病床についたため、未完に終わつたが、奥村土牛によつて竜の眼が入れられ、本門寺大堂の天井に納められた。



竜（本門寺天井画）

自作の作品を収蔵し、一般公開するため、彼自身が設計した竜子記念館（中央四二一一）は、昭和三七年に居宅前に建設、翌年開館した。現在、大田区に移管され、区立美術館として活用されている。